目次

第一講 演習問題(1)……p. 2
第二講 演習問題(2)……p. 8
第三講 演習問題(3)……p. 14
第四講 演習問題(4)……p. 20

第一講　演習問題(1)

次の文章は『讃岐典侍（さぬきのすけ）日記』の一部である。この日記は作者（讃岐典侍）と堀河天皇との親しい交流、および天皇没後の出来事を記している。次に掲げた箇所は、前段では、堀河天皇没後、新しい天皇の即位式を間近にした日、作者が自分の家から、院（白河院）たちがとり行う亡き堀河天皇のための法事に出かけていく時のようすを記し、後段では、内裏で行われる即位式当日の事柄を記す。この文章を読んで、後の問に答えよ。

十九日に、例の、参らんと思ふに、雪、夜よりも高く積もりて[1]こちたく降る。[注1]いそがしさ、いまいくほどなく残り少なくなりにたれば、おほかたの人も、夜を昼になして、ものも聞こえぬまでいそぐめれば、我は、この月ならんからにいそがしとて参らざらんが口惜しさに、出で立つを、[2]一人うけひく人なし。「[注2]さばかりいそがしくし散らかせ給うてよかし。今日参らせ給ひたらんに、院も大臣殿も、[3]よにいみじともあらじ。参らせ給はずとも、悪しきこともあらじ。かばかり雪は道も見えず降るめり。我が御身こそ、車の内なればさてもおはしまさめ、御供の人は、いかでか堪（た）へんずるぞ」など、わびあひてとどめつれど、「人たちによしと思はれんとて参ることならばこそあらめ、この月ならんからに、いそがしとて欠くべきことかは、[4]いさましくうれしきいそぎにてあらんだに、それに障（さは）るべきことかは。我を少しもあはれと思はん人は、今日は参ら

せよ」と言ふままに、気色(けしき)も変はるがしるきにや、言はれぬる人ども、「さばかり思しめし立たんこと、妨げ参らすべきことならず。車寄せよ」と、供の人呼ばせなどするほどに、例始まるほどと思ふほど、やうやう日たくるに、[5]参らでやみなんずるなめりと思ふ、口惜しくわりなきに、「人ども[6]来ぬれば。とく」と言へば、うれしくて乗りぬ。

道のほど、まことに堪へがたげに雪降る。車の内に降り入りて、雑色(ざふしき)、牛飼ひ、みな頭(かしら)白くなりにたり。牛の背中も、白き牛になりにたり。二条の大路には、[注3]大宮の道もなきまで降る。

参りたれば、人々、「あな、いみじ。例よりも日たけつれば、『今日はえ参らせ給はぬなめり。ことわりぞかし。いそがしくおはしつらん』と申しあひたりけるに、[7]おぼろけならぬ御こころざしかな。今日は」とあはれがりあひたり。

十一月も、はかなく過ぎぬ。

十二月朔日(ついたち)、まだ夜をこめて[注4]大極殿に参りぬ。西の陣に車寄せて、[注5]筵道(えんだう)敷きてゐるべき所とてしつらひたるに、参りぬ。ほのぼのと明け離るるほどに、瓦屋どもの棟、霞みわたりてあるを見るに、昔、[注6]内へ参りしに、過ぎざまに見えしほどなど、思ひ出でられて、つくづくとながむるに、北の門より、長櫃(ながびつ)に、[注7]ちはや着たるものども、蘇芳(すはう)の濃き、[注8]打ちたるくはう

こくの出(いだ)し衣(ぎぬ)入れて、持ちて続きたる、別におもしろく見ゆべきことならねど、所がらにや、めでたし。人ども、見さわぎ、いみじく[8]心ことに思ひあひたる気色どもにて、見さわげども、[9]ただ我は、何ごとにも目も立たずのみおぼえて、南の方を見れば、例の、[注9]八咫烏(やたがらす)、見も知らぬものども、[注10]大頭(おほがしら)など立てわたしたる見るも、夢の心地ぞする。

注1　いそがしさ―即位式に臨む準備のいそがしさ。
注2　さばかりいそがしくし散らかせ給うてよかし―「自分でよけいいそがしくしたいのならそうすればよい」という、まわりの人たちが作者に投げかけた非難めいた言葉。
注3　大宮―法事の行われる堀河院御所。
注4　大極殿―天皇即位式の行われる内裏にある建物。
注5　筵道―通路に敷く敷物。
注6　内―内裏。
注7　ちはや―衣装の一種。
注8　打ちたるくはうこく―砧(きぬた)で打って光沢を出した衣装の一種。
注9　八咫烏―八咫烏の飾りを先端につけたのぼり。
注10　大頭―即位式に使う旗の一種。

問一　傍線部１「こちたく降る」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　心地よいほど降る。
イ　はなはだしく降る。
ウ　こちらへ向かって降る。
エ　いつまでもいつまでも降る。
オ　身体に当たって痛くなるほど降る。

問二　傍線部２「一人うけひく人なし」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　同意する人がだれもいない。
イ　話し相手になってくれる人がだれもいない。
ウ　私の仕事を手伝ってくれる人がだれもいない。
エ　私一人にしておいてくれる人がだれもいない。
オ　私の袖を引いて連れて行ってくれる人がだれもいない。

問三　傍線部３「よにいみじともあらじ」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　世間では普通なことだとお思いになるでしょう。
イ　はなはだ熱意のあることだとお思いになるでしょう。
ウ　それほど殊勝なことだとお思いにならないでしょう。
エ　世の中によくあることだとはお思いにならないでしょう。
オ　これからもずっとそうであるとお思いになるかどうか分かりません。

問四　傍線部４「いさましくうれしきいそぎにてあらんだに、それに障るべきことかは」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　気持ちが高揚するほどうれしい即位式であるのに、そのための準備や法事などがあって、差し障りの多いことだ。
イ　法事にいそいそ出かけることはうれしいことであるが、まわりの人を説得するのに勇気がいり、差し障りの多いことだ。
ウ　まわりの人々の反対を押し切ることが難しく、それが法事に出かける差し支えになるのだとしたら、しかたのないことだ。
エ　気持ちが浮き浮きするようなうれしい即位式の準備であってさえも、それが法事に出かける差し支えになるだろうか、ならない。
オ　雪の中をいそいで出かけるのは勇気がいり、大変なことでさえあるが、それが法事に出かける差し支えになるだろうか、ならない。

問五　傍線部５「参らでやみなんずるなめりと思ふ」とあるが、どうしてこのように作者は思ったのか。次の中から最適なものを選べ。

ア　いつものように法事を始めるために、何日でも参加者を待っているだろう、と思ったから。
イ　いつものように自分のしたくにてまどってしまい、そのうちに日も高くなってしまった、と思ったから。
ウ　いつものようにぐずぐずしているうちに、出かけて行く気がなえてしまい、どうでもよい、と思ったから。
エ　法事をいつものように始める前に、雲に隠れて日がなかなか出てこず、取りやめになるだろう、と思ったから。
オ　まわりの者が賛同してくれず、ぐずぐずしているうちに、法事が始まる時間になってしまった、と思ったから。

問六　傍線部６「来」の読みをひらがなで書け。

問七　傍線部７「おぼろけならぬ御こころざし」とはだれの「御こころざし」のことを言っているのか。次の中から最適なものを選べ。

ア　院　　イ　人々　　ウ　大臣殿　　エ　堀河天皇　　オ　作者

問八　傍線部８「心ことに思ひあひたる気色どもにて」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　格別なことだとお互いに思っているようすで。
イ　普通と違ってお互いのことを思っているようすで。
ウ　意外なことだとお互いが思っているようすなので。
エ　気持ちをお互いに高めあうようなまわりのようすで。
オ　気持ちがことさら緊張しているとお互いに思っているようすで。

問九　傍線部９「ただ我は、何ごとにも目も立たずのみおぼえて」とあるが、どうして作者はこのように思うのか。次の中から最適なものを選べ。

ア　常にひかえめな性格なので、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。
イ　まわりの人々とは年齢も違い、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。
ウ　亡き天皇のことを大切に思い、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。
エ　前の天皇が亡くなった後、病気がちになり、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。
オ　見慣れている光景ばかりなので新鮮味が感じられず、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。

模範解答

第一講

〈解答〉

問一 イ　問二 ア　問三 ウ

問四 エ　問五 オ　問六 き

問七 オ　問八 ア　問九 ウ

〈現代語訳〉

十九日に、いつものように、(亡き堀河天皇の月命日の法事に私は) 参上しようと思うが、雪が、夜から高く積もってはなはだしく降る。(即位式に臨む準備の) 忙しさは、(即位式まで) もうどれほどもなく残り少なくなってしまったので、家の者もみな、昼夜関係なく、話もできないほどに急ぐようなので、私は、この月だからといって忙しいということで参上しないのが残念で、出かけるのだが、同意する人がだれもいない。「自分で余計いそがしくしたいのならそうすればよい。今日参上なさっても、院も大臣殿も、それほど殊勝なことだとお思いにならないでしょう。参上なさらなくても、悪いこともないだろう。これほど雪は道も見えないほどに降るようだ。ご自分は、牛車の中なのでそれでもよくていらっしゃるが、お供の人は、どうして耐えられようか」など、(みな) 迷惑に思って止めたけれども、(私が)「人々によいと思われようとして参上するならやめもしようが (そうではないので)、この月だからといって、忙しいということで休んでよいことか、いや、よくない。気持ちが浮き浮きするようなうれしい即位式の準備であってさえも、それ (が法事) に (出かける) 差し支えになるだろうか、(いや、) ならない。私を少しでも気の毒だと思う人は、今日は参上させよ」と言うにつれて、顔色も変わるのがはっきりわかったのだろうか、言われた人々は、「それほどご決心なさることを、お妨げ申し上げてよいことではない。牛車を寄せよ」と、供の人を呼ばせなどするうちに、いつも (法事が) 始まる頃と思ううち、だんだん日が高くなるので、参上しないで終わってしまうのであるようだと思うことが、残念でひどくつらいが、「供の人が来たから。早く」と言うので、うれしくて (牛車に) 乗った。

道中、本当に耐え難い様子で雪が降る。牛車の中にも降り込んで、雑色や牛飼いは、みな頭が白くなってしまっている。牛の背中も、白い牛（のよう）になっている。二条大路には、法事の行われる堀河院御所の道もなくなるほどに降る。

参上したところ、人々は、「ああ、殊勝なこと。いつもよりも日が高くなってしまったので、『今日は、参上なさることができないのであるようだ。もっともだよ。忙しくていらっしゃるのだろう』とみなで申し上げていたのに、並々ならぬ（あなた〔＝作者〕の）お気持ちですねえ。今日は」とみな感じ入っていた。

十一月も、あっけなく過ぎた。

十二月一日、まだ夜が深いうちに大極殿〔＝天皇即位式の行われる内裏にある建物〕に参上した。西の陣に牛車を寄せて、筵道を敷いて控え所として支度してある所に、参上した。ほのぼのと夜が明けた頃に、瓦葺きの御殿の棟が、一面に霞んでいるのを見ると、昔、内裏へ参上した時に、通りがけに見えた様などが、ふと思い出されて、しみじみと物思いにふけっていると、北の門から、長櫃に、ちはやを着た者たちが、蘇芳色の濃いのや、砧で打って光沢を出した衣装の出だし衣を入れて、持って続いたのは、特別におもしろいと見えるはずのことではないが、場所柄であろうか、すばらしい。人々は、見て騒ぎ、たいそう格別なことだとお互いに思っているようすで、声を上げて見ているけれども、ただ私は、（亡き天皇のことを思い）何事にも目も止まらず冷めるばかりに思われて、南の方を見ると、いつものように、八咫烏の飾りを先端につけたのぼりや、見も知らないもの、即位式に使う旗の一種などを並べ立ててあるのを見るにつけても、夢のような心地がする。